

Title	人間知性研究センター キックオフシンポジウム (5月23日 三田キャンパス東館6階G-SECLab)
Sub Title	The kickoff symposium of Research Center for human cognition
Author	川畑, 秀明(Kawabata, Hideaki)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.9, (2009. 8) ,p.2- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000009-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2009年5月23日、慶應義塾大学と独立行政法人理化学研究所との包括協定に基づいて人間知性の統合的理解を目指して形成された「人間知性研究センター」のキックオフシンポジウムが開かれた。今回のシンポジウムは、センターの設立趣旨の通り、統合的な人間理解を目指したもので、「知性」の生物学的基礎から文化的、工学的側面に至るまで幅広い視座に富み、講演者と聴衆との活発な意見交換がなされた。

開催に先立ち、本拠点リーダーで、かつ人間知性研究センター長である渡辺茂・文学部教授より、センター設立の趣旨と今後の知性研究の展望について知性進化の観点から説明があった。

ついで、特別講演者である清水透・南フロリダ大学心理学部教授が「知性の起源と進化」という表題で、進化の過程でヒトがどのように知性を紡ぎ出す脳を獲得してきたのかについて、特に比較神経解剖学の立場から講演いただいた。ハトなどの知的行動を示す動物の脳の構造が必ずしもヒトの脳と同じ構造ではないという知見の紹介や、ヒトのように脳が巨大化するだけが適応ではないというディスカッションなど、自然界における「知性」の多様性について考えさせる講演であった。

その後、塾内の3つのグローバルCOE拠点から、まず、岡野ジェイムス洋尚・医学部准教授が「ヒト神経疾患モデルマーマモセットの作成と脳科学のための画像技術の開発」について講演した。マーマモセット受精卵への遺伝子導入法を確立し、世界初のトランスジェニック（遺伝子改変）霊長類の作成に成功したこと、MRIを用いた拡散テンソルトラクトグラフィなどの最新の画像技術を駆使して、神経の軸索走行を非侵襲的に描出することを可能にしたことなどが述べられ、今後のヒト神経疾患の動物モデルとなるマーマモセットを作成・解析について、最先端のトピックスについて紹介があった。医学分野に限らず、脳科学の分野においても応用可能性が高いだけに、参加者聴衆も真剣な眼差しで講演に聞き入っていたようであった。ついで、今井倫太・理工学部准教授が「ヒューマン・ロボットインタラクションからみる人間の知性」について、ヒトとロボットとのインタラクションを通して明らかになりつつある人の知性の側面について紹介した。研究室のあらゆるもの（冷蔵庫やポットなど）に顔のパターン化を施すことによって見えてくる人のコミュニケーションなど、知性の生物学的基礎とはまた別の視点からの紹介がなされた。さらに、川畑秀明・文学部准教授は「神経美学 (Neuroaesthetics) の可能性」について紹介した。近年のニューロエステティクス（神経美学）研究の動向は、神経科学と人文社会科学の融合的アプローチとして注目されている。講演では、fMRI研究によって明らかになってきた、美的評価における前頭葉報酬系の機能的役割を中心に、審美的感覚の神経科学的基盤について紹介するとともに、芸術を鑑賞・創造する側の生物学的基礎と文化的背景がどのように関わるかについて述べた。

最後に、入来篤史・理化学研究所脳科学総合研究センターチームリーダーが「人間知性進化の神経生物学的メカニズム」について講演した。サルは道具使用の獲得、道具が身体の延長となる神経生理学メカニズム、さらにはそのようなメカニズムがどのような遺伝子発現要因によるのかなど、自身の最先端の研究について紹介した。また、人間知性の基盤となった言語や概念形成の脳神経メカニズムの進化の過程を再考し、「自然淘汰」から「ニッチ構築」そして「意図的ニッチ構築」へと相転的な展開があったとの考察を試みた。

聴衆が多岐にわたる専門性をもっていただけに、5名のいずれの講演の後では、講演者と聴衆との活発な議論が飛び交った。全ての講演終了後に予定されていた総合討論が時間の都合上できないほどであった。これも、人間知性に対する幅広い関心の表れを示すものであると同時に今後の人間知性研究センターの発展を予感させるものであろう。

(川畑秀明)

The kickoff symposium organized by Research Center for Human Cognition, founded upon an agreement between Keio University and RIKEN, was held on May 23, 2009. The symposium aimed to promote a deeper understanding of human cognition through the synthesis of biology, culture, and technology. The topics of the symposium were as follows. In an invited lecture, Toru Shimizu (Department of Psychology, Univ. of South Florida) discussed the origin and evolution of cognition. In addition, Hirotaka James Okano (School of Medicine, Keio Univ.) discussed the investigation of human diseases of the nervous system using a marmoset model

and the development of imaging technology for brain science; Michita Imai (Faculty of Science and Technology, Keio Univ.) gave a talk on human cognition through human-robot interaction; and Hideaki Kawabata (Faculty of Letters, Keio Univ.) talked about the applications of neuroaesthetics. To end the symposium, Atsushi Iriki (RIKEN Brain Science Institute) discussed the neurophysiological mechanisms of human cognitive evolution. Each lecture presented new and exciting research on human cognition and stimulated active discussion between lecturers and audience members.